

解答

一　問一　うつとりと、ただおやすみだけを楽しんでいたときの気持ちをあらわしたもの。

問二　すべて平板な書でつづけ書にすることにより、水と一緒にとけあった一体感が生み出され、身も心も託してやさらぐ様子が透明感を持って表現されている。

問三　水に身をゆだねているといつても、けっして水に流されているのではない。状況の中に意思をもつているということ。

問四　しづかに、ゆつたりと泳ぐ人物を表現しているという現実を踏まえ、からだが水ととけあい、たましいは水、自然と一つとなり、天地にとけこむことを表現しているところが現実をこえている。

問五　① 異論　② 省略

解説

二

問一　① 貧困　② 勤勉　③ 神秘

母の死を教える為に隼人が探した本に書かれた方法で、直也が母と話せたということに驚き、話せるはずがないのに自分も話したいと思い、頭の中の整理がつかず、混乱する気持ち。

問三　隼人は母の死を説明することに気をとられ、死を理解し、受け止めたつもりでいても、直也の言葉により母と話せるのではないかと、気持ちが揺れ動くことがあった。しかし、直也に母の死を信じると言われ、母は死に、二度と会つたり、話したりできないという現実に直面することで、耐えられない程哀しくなった。

解説

一

問一　本文中盤に、高田敏子さんは「おやすみ」との詩から「ようすく」「きもち」を想像し、その気持ちに同化し、共感し、そのことを説明しているという記述があります。「三行目からは、」で始まる段落をみると、おやすみの心の状態が書かれているので、気持ちを表している箇所を適切にまとめて説明します。

問三　傍線3、4の前後で主体性が表れている部分をまとめて書きあらわします。主体性とは自分の意志・判断で行動しようとする態度のことです。

二

問二　傍線1の前後にある隼人の描写に着目します。直也が「ママと話せたよ」という話を、嘘だと思いつつも、もしかしたら話せるかもしれないと思っている様子を説明します。

問三　隼人は、母の死を受け入れられない直也に、死を認識させることを必死に考え、頭を悩ませています。そのような中で、直也から「死を信じる」という言葉を聞き、初めて母の死が現実のものとして感じられ、重苦しく辛い哀しみに襲われている様子をまとめます。